



TITLE:

# インドネシアの大学生によるタルビヤの展開：大学ダアワ運動の発展を支えた人々とイスラーム学習

AUTHOR(S):

野中, 葉

---

CITATION:

野中, 葉. インドネシアの大学生によるタルビヤの展開：大学ダアワ運動の発展を支えた人々とイスラーム学習. 東南アジア研究 2010, 48(1): 25-45

ISSUE DATE:

2010-06-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/141764>

RIGHT:

## インドネシアの大学生によるタルビヤの展開 —— 大学ダアワ運動の発展を支えた人々とイスラーム学習 ——

野 中 葉\*

### Development of *Tarbiyah* among Indonesian Students: The People and the Islamic Learning System that Drives the *Dakwah* Movements in Indonesian Universities

NONAKA Yo\*

This paper presents the origins of and the expansion of *Tarbiyah* in Indonesia based on the findings gathered through interviews with informants and examines its effectiveness as a learning system of Islam from the student's point of view. *Tarbiyah* is a system to learn Islam which has been used among the students of the *dakwah kampus* organization in non-religious universities in Indonesia. *Tarbiyah*, which means originally means "education" in Arabic, has expanded rapidly all over the country in the past 20 years. This system was introduced to Indonesia in the early 1980s by some Indonesian students who had studied in Saudi Arabia, and was adopted by students in the secular, elite universities. The subsequent expansion and development of *Tarbiyah* came from the students' voluntary activities and their personal networks. The advantages of this learning system include its continuity, interactivity, and its ability to deepen relationships among members. The main contents of *Tarbiyah* are related to the basis of Islamic teachings which are quite new to the most Muslim students in secular universities in Indonesia and therefore widely attracts their attention and interest widely.

**Keywords:** Islam, Indonesia, *dakwah*, university, student, *Tarbiyah*, Islamism, Islamic movement

**キーワード:** イスラーム, インドネシア, ダアワ, 大学, 大学生, タルビヤ, イスラーム主義, イスラーム運動

## I は じ め に

### I-1 問題の所在

インドネシアの大学では、現在、ダアワ・カンパス<sup>1)</sup>と呼ばれるイスラームの活動が活発に

---

\* 慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科; Graduate School of Media and Governance, Keio University, Keio University Shonan Fujisawa Campus, 5322 Endo, Fujisawa-shi, Kanagawa 252-0882, Japan  
e-mail: yon@sfc.keio.ac.jp

1) ダアワ・カンパスとは、「大学キャンパスにおけるダアワ」を指す。ダアワは、アラビア語起源の単語で、「イスラームへの呼びかけ」を意味する。日本語では「宣教」と訳されることもある。イノ

行われている。各大学では大学公認の学生組織としてダアワ・キャンパス組織が設置され、イスラームの勉強会や、イスラーム関連の行事やイベントの開催など、学内でイスラームを広めるダアワの活動が行われている。このダアワ・キャンパスでは、一般に、タルビヤと呼ばれるイスラーム学習が取り入れられている。アラビア語で「教育」を意味するタルビヤは、特に非宗教系の大学に通う学生たちがイスラームを学ぶ学習体系として、この20年ほどの間に、インドネシア各地に広まった。現在では、ダアワ・キャンパスの学生たちを支持母体として設立され、都市部を中心に大きな支持を集めている福祉正義党の党員育成プログラムとしても採用されており、<sup>2)</sup> タルビヤで学ぶ人々の裾野は、大学生たちに留まらず社会の幅広い層に広がっている。

本稿では、当事者へのインタビューをもとにタルビヤの成立と拡がりを経史的に整理し、また、当事者の視点からタルビヤの手法や学習の内容を検証する。

## I-2 先行研究における「タルビヤ」

国立大学を主な拠点とするダアワ運動については、1990年代頃から、インドネシアにおける新しいタイプのイスラーム台頭の一つの現れとして研究で取り上げられるようになった。これらの研究では、シャリーアの施行やイスラーム国家樹立を目指す点が強調されている。例えばブライネッセンは、1990年代以降、西欧の資金援助を受け、西欧やキリスト教世界との協調を是認し、市民社会の構築に寄与するムスリム NGO が多数出現する一方で、市民社会の形成とは相容れない“ジャマア (jama'ah)”と呼ばれるムスリム集団が出現しているとし、テロリストを育成するとされるジャマア・イスラミーヤ (JI)、世界規模のカリフ制導入を目指す解放党 (ヒズブ・タフリール) と並ぶ3つのジャマアの一つとして、タルビヤ運動を取り上げている。ここでタルビヤ運動は、インドネシアの世俗の大学を拠点とするムスリム同胞団の姉妹組織だと評され、JI と比べ政治性が弱く、武装闘争も行わないが、世俗国家に反対しシャリーアに基づく国家樹立を目指す点、セルシステムを用いた不透明なヒエラルキー構造を有する点、イスラームが生活の全ての側面を規定すると信じる点、などにおいて両者は共通すると論じられている。[Bruinessen 2003]

また近年では、躍進する福祉正義党との関連からダアワ・キャンパスに注目があつまり、その役割や影響を指摘する研究が増えており、その一部で、イスラームを学ぶ手法として学生たちに受け入れられたタルビヤについても言及がなされている。

→ インドネシア語の dakwah から、「ダッワ」と表記されることもあるが、本稿では、インドネシア語あるいはアラビア語の音に習い「ダアワ」と表記する。

2) 福祉正義党は、2009年4月に実施された総選挙において7.88%の得票率、59議席を得て、選挙に参加した38政党中4位の位置を確保し、イスラーム諸政党の中で最大の支持を得た。7.34%の得票率、45議席を獲得した前回2004年の総選挙で大躍進したと評されたが、今回の選挙では微増にとどまった。(選挙結果は、総選挙委員会 (KPU) の発表による。)

インドネシアにおけるイスラーム主義の拡大を詳細に記述した見市は、大学キャンパスのイスラーム主義運動であるダアワ・カンパスを基盤として、1998年にイスラーム主義政党の正義党（福祉正義党の前身）が結成された〔見市 2004: 67〕とし、ダアワ・カンパスの全国的展開において「タルビヤが最大」勢力〔同上書: 77〕だと述べている。

大学生による過去 20 年間のタルビヤ運動が正義党の設立をもたらしたとするダマニックは、タルビヤが、「エジプトのムスリム同胞団の影響を強く受けている」と主張する。そしてその起源について、「1970 年代末から 80 年代初頭、中東に留学したインドネシア人たちが」帰国後に、「ムスリム同胞団の手法を紹介」し、これが「ダアワ・カンパス運動の学生たちに受け入れられて、タルビヤ運動として知られることになった」と論じている〔Damanik 2002: 94-99〕。

タルビヤの起源を中東のムスリム同胞団だとする論調は、他の研究にも見られる。「ムスリム同胞団の育成モデルが、タルビヤの人々に用いられた」とするフルコンは、「同胞団の思想をインドネシアに持ち込んだのは、個人としてはナッシール、<sup>3)</sup> 組織としてはインドネシア・イスラーム・ダアワ評議会<sup>4)</sup>である」として、インドネシアのイスラーム近代派勢力として知られる旧マシュミ党の影響を主張〔Furkon 2004: 124〕し、タルビヤや福祉正義党に受け継がれたとされる、同胞団の創始者ハサン・アル＝バンナの思想を詳細に分析している。一方、イムダドゥンは、正義党を「インドネシアのムスリム同胞団」〔Imdadun 2003: 3〕と呼び、同時期中東からインドネシアに流入したとされる解放党と合わせ、その伝播のプロセスを論じている。さらに最近の研究では、同じくタルビヤと福祉正義党の発展を、インドネシアのイスラーム化の視点から検証したマフムディ〔Machmudi 2006〕や、タルビヤ運動に参加する人々の特性をアンケートの分析から明らかにしたサルマン〔Salman 2006〕の研究がある。

上記の中で、ブライネッセンと見市は共に、タルビヤを中心とする大学のダアワ運動の政治的側面に注目し、穏健ながらも究極的にイスラーム国家樹立を目指すグループだと見做している。一方、それ以外の研究の論者は全てインドネシア人であり、タルビヤの学習に参加した経験を持つものや福祉正義党のメンバーも含まれている。<sup>5)</sup> これらの研究では、福祉正義党の成功を検証するという観点から、タルビヤと福祉正義党の関係や、同政党が誕生した過程を論じ

3) ナッシール (M. Natsir) は、スカルノ大統領時代に大きな勢力を誇ったイスラーム政党マシュミ党の党首であり、インドネシアの首相を務めた経験も持つ。

4) ダアワ評議会 (Dewan Dakwah Islamiyah Indonesia) は、1967 年、ナッシールら元マシュミ党幹部によって創設された。マシュミ党は、スマトラの反乱に加担したかどで、1960 年にスカルノ大統領によって非合法化され、スハルト体制下でも復権が許されなかった。政党を通じた政治活動を諦めざるを得なかったナッシールらは、ダアワによる人々への啓蒙と社会変革を目指し、同組織を立ち上げた。

5) ダマニックへのインタビュー (2008 年 7 月 17 日実施)、マフムディへのインタビュー (2008 年 7 月 14 日実施) より。マフムディは、2004 年福祉正義党創設時の創設メンバーの一人でもある。サルマンは、著作の中で、自分のムラッビ (タルビヤの小グループの指導者) に対するインタビューを引用しており、タルビヤで学んでいたことが示唆される〔Salman 2006: 238 (注 31)〕

るものが多い。また、手法面、思想面ともに十分な検証がなされないまま、中東発祥のイスラム同胞団とのつながりや影響が強調される傾向にある。

### I-3 研究の手法と視点

これまでの研究は、タルビヤをイスラーム主義と結び付けてその政治イデオロギーを明らかにするものや、タルビヤが福祉正義党に発展する過程を分析したものも多く、タルビヤがインドネシアの学生たちに受け入れられ拡大した経緯は詳しく論じられていない。また多くの研究で、タルビヤが中東のイスラム同胞団をモデルにしたことが前提となっており、同胞団の創始者、ハサン・アル＝バンナ思想についての分析は行われているものの、実際にインドネシアの学生たちが実践するタルビヤの内容や手法についての検証はあまり行われてこなかった。本稿では、これまでの研究成果を踏まえつつ、以下に挙げた新たな視点から、インドネシアの学生にタルビヤが定着し広まった過程をインタビューを通じて描くことを目指す。

まずは、福祉正義党という政党ではなく、タルビヤそのものへの着目である。タルビヤの意義は、イスラームの政治的伸張のみならず、特に、非宗教系の大学の学生たちにイスラームへの覚醒を広くもたらしたことにある。本稿では、世俗の教育を受けて育った教育水準の高い人々の間に、イスラームの理解と実践の重要性を知らしめたタルビヤそれ自体を考察の対象とする。

次に、タルビヤと中東のイスラム同胞団のつながりを指摘するだけでなく、運動に関わった当事者たちの視点から、その思想や手法を明らかにする点である。タルビヤに対する同胞団の思想的影響については先行研究が指摘しているが、実際のタルビヤの思想や手法についての検証は多くなされていない。本稿では、当事者へのインタビューをもとにタルビヤの手法や学習内容を検証し、タルビヤの拡大をもたらした諸要素を明らかにする。

また、先行の諸研究では、タルビヤが「タルビヤ運動 (Gerakan Tarbiyah, Tarbiyah Movement)」や「タルビヤ集団 (Jemaah Tarbiyah)」など様々に呼ばれ、用語として統一されていない印象を受ける。しかしタルビヤが開始された直後から、当事者たちはこのイスラーム学習をタルビヤと呼んでいた。<sup>6)</sup> そこで本稿では、タルビヤを、「1980年代前半以降に、主として非宗教系大学で見られる、イスラーム教育を柱とするダアワ運動の潮流」として定義する。

6) 彼らは当初から、イスラーム学習を始める時に、「さぁタルビヤをするよ。(Ayo, Tarbiyah, ayo.)」という声かけをしていたという (タルビヤ最初期のメンバーの一人、ザイナル・ムッタキンへのインタビューより (2008年7月25日実施))。



## II タルビヤの導入と全国への拡がり

### II-1 タルビヤ開始前後の大学を取り巻く政治社会状況

タルビヤが始まったとされる 1980 年代前半は、スハルト体制が強固になった時期である。同体制下では、開発と経済発展が最優先の課題であり、そのための政治的安定が不可欠とされた。体制を脅かす危険のある組織や運動は徹底的に排除の対象となり、国民を非政治化し、国民の生活や活動を体制側が統御、監視する政策が次々と打ち出されていった。大学生や学生運動との関連で、この時期、最も重要なのは、1978 年の学生行動以後に出された「キャンパス生活正常化・学生調整組織（NKK/BKK: Normalisasi Kehidupan Kampus/Badan Koordinasi Kemahasiswaan）」の規則<sup>7)</sup>と、1983 年から 1985 年にかけて制定されたパンチャシラ<sup>8)</sup>「唯一原則（Asas Tunggal）」の政策であろう。

1977 年から 1978 年にかけて、スハルトの第 3 期大統領再選に反対する学生たちは、全国で抗議行動を活発化させた。これに対し政府は、バンドゥン工科大学やガジャマダ大学など全国の主要大学に軍隊を出動させ、キャンパスを封鎖して学生たちの行動を封じた。その後政府は、多くの学生活動家たちを逮捕すると共に、教育文化大臣決定として NKK/BKK を発令した。抗議活動などの実質的な政治活動を禁じ、学生たちを学業のみに専念させることを規定する NKK によって、それまで大学における学生運動を主導してきた学生評議会（Dewan Mahasiswa）は解散させられるに至った。<sup>9)</sup> 大学の新たな組織構造として BKK が設置され、大学レベルの学生活動は、学生活動ユニット（UKM: Unit Kegiatan Kemahasiswaan）という形態で学長の傘下に置かれることとなった。これにより、学生活動に対する学長の権力は絶大になり学生自治の自由は奪われた。その結果、政局に影響を与える全国規模の学生運動は沈静化し、スハルト体制は一層強固なものとなった。<sup>10)</sup> また、イスラーム学生同盟（HMI: Himpunan

7) NKK は、大学キャンパス正常化に関する教育文化大臣決定 SK Menteri P&K No.0156/U/ 1978 による。また BKK は、高等教育現場における学生組織構造に関する教育文化大臣決定 SK Menteri P&K No.037/U/ 1979 による。NKK/BKK の詳細については、Culla [1999: 117-125], Suryadi [1999: 71-88] を参照。

8) パンチャシラは、インドネシア建国の基本理念として憲法前文に記された建国五原則。① 唯一至高なる神性、② 公正で文化的な人道主義、③ インドネシアの統一、④ 協議と代議制において叡知によって導かれる民主主義、⑤ インドネシア全国民に対する社会的公正、の 5 つから成る。

9) 学生評議会を実際に解散させた決定は、当時、治安秩序回復作成司令部（Kopkamtib: Komando Operasi Pemulihan Keamanan dan Ketertiban）長官だったスドモによる、SK Kopkamtib No. 02/Kopkam/ 1978。

10) NKK/BKK の体制は、学生組織公式手引書に関する教育文化大臣決定 SK No.045/U/ 1990 が発令される 1990 年まで継続した。同決定により、大学レベルの学生自治組織（SMPT: Senat Mahasiswa Perguruan Tinggi）が認められ、この傘下に学部レベルの自治組織（SMF: Senat Mahasiswa Fakultas）と学生活動ユニット（UKM）が置かれることとなった。[Culla 1999: 134]

Mahasiswa Islam) など一大学の範囲を超えて活動を展開する学生組織は、大学外組織 (Organisasi Ekstra Kampus) と呼ばれ、BKK の組織構造に含まれないことが明確化され、大学キャンパス内での活動を禁じられた。大学内の学生活動とは切り離され、キャンパスという活動の拠点を失った結果、これらの組織活動は次第に下火になっていった。

1980 年代に入るとスハルトは、政治的安定を確実にし、磐石な体制を築くため、全ての政党と大衆団体にパンチャシラを「唯一原則」として受け入れさせる政策を打ち出した。<sup>11)</sup> この政策においては、イスラームもパンチャシラ以外のイデオロギーの一つと見做され、いかなる政治・大衆団体もこれを原則とすることは不可能となった。イスラームの 2 大衆団体であるナフダトゥル・ウラマーとムハマディヤは、1983 年と 1985 年に、また当時唯一のイスラーム政党であった開発統一党も、1984 年に「唯一原則」を受諾した。一方、イスラーム学生同盟 (HMI) は、「唯一原則」を受け入れるか否かを巡り内紛が起こり、受諾に反対するグループは HMI MPO (Majelis Penyelamat Organisasi: 組織救援評議会) を結成して HMI の主流派から分裂した。<sup>12)</sup> また、ムスリムの高校生を中心とするインドネシア・イスラーム学生組織 (PII: Pelajar Islam Indonesia) は、受諾を拒否して非合法化され、公には活動禁止の処分となった。<sup>13)</sup>

## II-2 サルマン運動<sup>14)</sup>

前節で見たとおり、1970 年代末から 1980 年代前半、社会的、集団的な活動を志す学生たちには、政府からの度重なる圧力がかけられていた。NKK/BKK の発令によって学生運動と大学自治には大幅な制限がかかり、またパンチャシラ「唯一原則」の強要によって、既存の学生イスラーム組織である HMI は分裂し、PII は解散させられた。しかし、大学モスクを活動拠点とするイスラーム活動は、学生運動や大学外組織の活動を制限された学生たちが加わり、それ以前に比べむしろ活発化する傾向にあった。特に、バンドゥン工科大学のサルマン・モスクの活動は突出し、全国の大学のイスラーム活動を牽引する役目を担っていた。

バンドゥン工科大学では、1950 年代半ばに、学生や若い講師たちによるモスク建設の運動が起こり、1960 年代初頭には、モスク育成者財団が発足して、金曜日の集団礼拝や日曜勉強会など学生に対する様々なプログラムが行われるようになった。1972 年にモスクが完成して以降、サルマンの名を全国に広く知らしめたのは、ダアワの活動を担う学生を養成するダアワ・ム

11) パンチャシラ「唯一原則」の政策については、高橋 [1995: 71-74] を参照。

12) パンチャシラ「唯一原則」を受け入れた HMI 主流派は、HMI MPO との対比で HMI Dipo と呼ばれる。Dipo とは、HMI の本部が置かれたジャカルタのディボネゴロ通りに因むものである。

HMI の内部抗争と HMI MPO の成立過程については、Karim [1997: 127-134] を参照。

13) 1987 年内務大臣決定第 120 号により、PII は公式に非合法化された。[Karim 1997: 128]

14) サルマン運動についての本節の記述は、野中 [2009] と一部重なる。

ジャーヒド・トレーニング（LMD）である。このトレーニングは、電気工学専攻の講師を務めていたイマドゥディン・アブドゥルラヒムによって考案され実施された。5日程度の期間中、イスラームの講義やディスカッションが行われたが、強調されたのはタウヒード（神の唯一性）であり、イスラーム諸学の知識の伝達よりも参加者の意識変革が目指された。LMDの意義の一つは、バンドゥン工科大学の学生に限らず、全国の大学から参加者を集めたことである。このトレーニングを受けた学生たちは、その後、各地域に戻り、それぞれのキャンパスでサルマンと同じようなダアワ活動始める中心的役割を担っていった。

学生と政府の対立が激化した1978年、イマドゥディンは、スハルト大統領を侮辱したという嫌疑で逮捕される。その後彼は、サルマンに戻ることは叶わず、サルマン運動は精神的支柱を失うこととなった。しかし一方で、NKK/BKKの発令によりキャンパスでの様々な運動を制限された学生たちは、安全で自由な活動の場を求めてサルマン・モスクに集うようになった。この結果サルマンには、より多くの学生たちが集結し、多様なプログラムの開発と実践が進められたのである。この時期に始まった主なプログラムには、全国の高校生を対象としたダアワの短期集中トレーニング（SII）、地域の中高生や幼稚園生、小学生を対象にしたダアワのプログラム（KarismaやPAS）がある。また、ウスロやメントリングと呼ばれる継続的なグループ学習の手法も、新たに導入された。

しかし同時にサルマンでは、組織の肥大化と硬直化、全国の学生への継続した支援の不足、リーダーの欠如など、様々な問題が次第に顕在化ようになっていた。バンドゥン工科大学の学生たちは、1987年、サルマンを離れて、独自の学生ダアワ組織ガマイス（Gamais）を創設した。その後、ガマイスで活動する学生たちには、タルビヤが次第に受け入れてられていく。<sup>15)</sup> 一方、LMDやSIIに参加した全国の学生たちは、その後地元でダアワを始め、展開していくための支援を必要としたが、サルマンはそれを提供できなかった。結果、サルマンの全国的な影響力は次第に弱まり、代わりに活動の拠り所を求める学生たちに指針を提供したのがタルビヤである。

### II-3 タルビヤの開始と全国への拡大

1980年代初頭、イスラームの政治的伸張に対する体制の様々な圧力にも関わらず、バンドゥン工科大学のサルマン運動の隆盛、またイスラーム書籍の流通<sup>16)</sup>や、世界的なイスラーム復興

15) 現在ガマイスは、規模や活動内容の点で、全国でも有数なダアワ・キャンパス組織の一つである。

16) この時期、新たに創設されたイスラーム出版社を通じて、中東や世界各地のイスラーム関連書が、インドネシア語に翻訳されて次々と出版された。中でも、ムスリム同胞団の創始者ハサン・アル＝パンナ、パキスタンのマウドゥディ、イランのシャリーアーティなどが、学生たちに好んで読まれた。代表的な出版社としては、ダアワ評議会（DDII）のメディア・ダアワ（Media Dakwah）、サルマンの出版部から発足したプスタカ（Pustaka）がある。



の動き<sup>17)</sup>などの影響が、全国の主要な国立大学で現れ始めていた。イスラームに対する熱意を持った学生たちが、各大学で活動を展開しようとする機運が高まっていた。<sup>18)</sup> こうした学生たちは、タルビヤによる継続的な学習を通じて、イスラームの理解を深め、ダアワの活動を実践していった。ここでは、各時代にタルビヤに関わった4人の人物に焦点を当てることで、タルビヤの導入と拡大のプロセスの一端を明らかにしたい。導入の経緯を知るため、中東に留学し、帰国後にタルビヤによる学生へのダアワ活動を展開したアブー・リドーと、初期のタルビヤの学習に参加したザイナル・ムッタキン、また拡大のプロセスを知るため、サルマン運動からタルビヤへと学生の移行が起こっていた1980年代末から1990年代初頭にかけて、バンドゥン工科大学で活動したディディク・アグスと、現在のダアワ・キャンパス組織で活動するフィディの4名を取り上げる。

### II-3-1 中東留学の経験をもとに、学生へのダアワに尽力——アブー・リドー<sup>19)</sup>

ジャワ西部のバンテン出身であるアブー・リドーは、マシュミ党を支持する家庭に育ち、高校時代にはインドネシア・イスラーム学生組織（PII）で活動した。その後、ジョグジャカルタの国立イスラーム大学に学び、イスラーム学生同盟（HMI）の活動に参加している。親を通じて、旧マシュミ党の代表ナッシールらとも交友を持ち、1980年代初頭、ナッシールらの創設したダアワ評議会（DDII）からの派遣で、サウジアラビアのリヤドにあるイブン・サウード・イスラーム大学に留学した。ダアワの専攻で修士号を取得し、1982年に帰国後は、ボゴール農業大学などで教鞭を取りながら、ダアワ評議会の活動家として全国の大学を訪れ、学生たちに対するダアワを行った。その後リドーは、1988年頃から、タルビヤの学習に積極的に参加し、タルビヤによるダアワを実践していく。ダアワ評議会はメンバーの多くは社会人で、イスラームの指導者とも呼べる人たちであり、学生に与える影響は大きかったが、学生と同じ目線でイスラームに向き合うことは難しかった。リドーは、次第に学生たちとの乖離を感じるようになっていった。一方タルビヤは、大学生を対象に毎週のペースで勉強会が行われており、学生がイスラームを学ぶ手法として効果的だと感じたという。

リドーによれば、タルビヤの手法や教材には、ムスリム同胞団の思想が大きな影響を与えて

17) 1970年代末のイラン革命、ソ連のアフガン侵攻などが引き金となり、イスラームの危機とムスリムの連帯を呼びかける風潮が世界的に広がっていた。

18) イスラームに目覚めた女子学生たちの間で、イスラーム式ヴェール（ジルバブ）着用の動きが広がり、これを政策的に禁止しようとする政府や学校側との衝突が顕在化したのもこの時期である。拙稿「野中2005」を参照。

19) アブー・リドーへのインタビューより（2008年11月27日実施）。アブー・リドーは俗称であり、本名は、アブディ・スマイティである。前述のマフムディはリドーを、ヒルミ・アミヌディン、ラフマット・アブドゥッラーと並び、タルビヤ集団（jamaah tarbiyah）の重要なイデオログ3人のうちの一人だとして論じている。[Machmudi 2006: 214-215]

いる。1980年代初頭、サウジアラビアの大学で教鞭を取っていた教授の中に、中東各地から集まったムスリム同胞団のメンバーがかなり多く存在していた。彼らは、組織的な活動を展開するのではなく、個人で大学の授業を教え、モスクで説教をした。リドーを始めインドネシアの学生たちは、大学や地域のモスクで彼らの思想に触れ、刺激を受けた。また、当時サウジアラビアでは、同胞団の指導者の著作を含め、多くのイスラーム関連の書籍が流通し、世界イスラーム青年会議（WAMY: World Assembly of Muslim Youth）<sup>20)</sup> などが主催するセミナーが頻繁に開催され、世界中のイスラーム運動の指導者が招待されて、講演を行っていたという。学生たちは、書籍や様々なセミナーへの参加を通じて、彼らの思想を学び、教化され啓蒙された。リドーは、帰国時には、現地で学んだ思想や教えをインドネシアで広めたい、そのことを通じて社会をより良い方向に変えていきたい、という気持ちを持っていた。帰国後、彼は、全国の大学生たちに対してダアワを通じてイスラームを説き、また一方で、多くのイスラーム関連書をアラビア語から翻訳して出版した。ムスリム同胞団の創始者ハサン・アル＝バンナの思想を知る代表的な著作として、現在でもインドネシアの学生たちに好んで読まれている『マジュムア・ラサーイル』<sup>21)</sup> を最初にインドネシア語に訳し出版したのも、アブー・リドーである。

1990年代後半、後に福祉正義党の幹部になるヒルミ・アミヌディン<sup>22)</sup>やラフマット・アブドゥッラー<sup>23)</sup>ら仲間たちとの交流を通じ、社会を改善するためにより強固なダアワの主体を作るべき、という結論に至った。スハルト体制崩壊直後の1998年、全国のダアワ・カンパス活動家などタルビヤで学ぶ人々が参加する投票により、現在の福祉正義党の前身である正義党が誕

20) WAMYは、正統イスラーム思想の正しい基礎付け、世界各地のムスリム青年組織の援助等を目的に、サウジアラビア政府によって1972年に創立された。リヤドに本部を置く。主な活動としては、国内外でのイスラームに関する講演会、研究会、討論会、キャンプなどの実施、世界のムスリム団体の相互交流のコーディネート、財政援助、イスラーム関係出版物の出版、配布などがある。[中田1994: 13-14]

21) *Majmu'ah Rasail Al-Imam Asy-Syahid Hasan Al-Banna*（ハサン・アル＝バンナ論考集）。アブー・リドーが翻訳したものは、ダアワ評議会（DDII）の出版部メディア・ダアワから出版された。同書は現在でも、ダアワ・カンパスに参加する学生たちの必読書である。現在多く流通しているのは、福祉正義党の現幹事長アニス・マッターらが翻訳したものだが、アブー・リドーが巻頭文を執筆している。後者は1997年に初版が出版された。筆者が手にしているのは、第10版（2004年版）である。[Banna 1997]

22) 現在は、福祉正義党の最高決定部門である諮問評議会（Majelis Syuro）議長を務める。東ジャワのイスラーム寄宿学校プサントレン・テブイレンの出身。リドーによれば、アミヌディンは、リドーより数年前から、サウジアラビアのマディーナ大学へ留学していた。

23) 1999年から2005年まで福祉正義党の試問評議会議長を務めた（アミヌディンの前任）。また、タルビヤで学ぶ人々からは、“タルビヤのシェイフ”とも呼ばれる。ジャカルタ出身で、中東への留学経験はないが、イスラーム寄宿学校で教育を受けた。タルビヤ開始当初から学習に参加し、1990年にはイスラーム教育施設を設立するなど、タルビヤの普及や青年の教育に尽力した。2004年には国会議員に選出されたが、2005年に病死した。その後、福祉正義党やタルビヤの仲間や支持者によって、彼の半生を紹介する「*Sang Murabbi*（尊氏）」というタイトルの映画も作成された。

生した。リドーは、何千もの投票用紙を大学生レベルにまで配布し投票を呼びかけるなど、投票をコーディネートし実施する役割を担った。結果、6割以上が政党設立に賛同した。<sup>24)</sup> そもそも、教育や育成だけでなく、政党を通じてダアワ活動を行い、イスラームを広めるべきという考えに、リドー自身も賛成だった。<sup>25)</sup> リドーは、正義党の52人の創設委員の一人として名を連ねている。その後、党の中央執行委員(DPP: Dewan Pengurus Pusat)となり、政党の理念や政治に対するコンセプト作りに尽力した。近年では、福祉正義党は、党の基本理念を示した『闘争基本哲学』(Filsafah Dasar Perjuangan) [MPP PKS 2008] を2008年3月に発表した。リドーはこの作成チームのリーダーを務め、また2004年から2009年まで、党選出の国会議員を務めた。

## II-3-2 タルビヤに参加した最初期のメンバー——ザイナル・ムッタキン<sup>26)</sup>

ザイナル・ムッタキンは、1983年初頭、ジャカルタの公立高校3年生の時、サウジアラビアの留学から帰国したヒルミ・アミヌディンが主宰する勉強会に参加した。ムッタキンによれば、これが後にタルビヤと呼ばれることになるイスラームの小グループ学習の始まりだという。高校時代、ムッタキンはインドネシア・イスラーム学生組織(PII)の活動に参加しており、同じくPII出身のアミヌディンがサウジアラビアから帰国後、PIIのネットワークを通じて呼びかけた高校生たちの勉強会に参加することになった。当時はもちろん、体系だった学習カリキュラムも勉強会を運営する組織もなかったが、アミヌディンと後輩の高校生たちの間の個人的なつながりによって、家族的なイスラームの勉強会がスタートした。同年、パンチャシラ「唯一原則」が国策大綱に盛り込まれ、ムッタキンらが活動するPIIにも、「唯一原則」受諾を巡って圧力がかかり始めていた。ムッタキンは、ジャカルタのPIIの主要メンバーの一人である。当時、「唯一原則」受け入れ拒否の議論が活発に行われていたという。一方で、純粋に安全にイスラームを学び活動する場を求めているムッタキンら高校生たちに対し、アミヌディンがタルビヤの勉強会を提供した。<sup>27)</sup> 高校生活動家たちにとって、中東帰りのイスラーム専門家から直接指導を受ける機会はほとんどない。彼は、誘いを受けてすぐに、喜んで参加を決めたという。

24) 正義党設立のプロセスは、Damanik [2002: 227-233] に詳しい。

25) リドーは、アッラーの教えの完全な実現のための政治教育の必要性を説いた著作の中で、「政党の役割の一つは、人々に政治的教育(タルビヤ)を行うこと」[Ridha 2002: 5] だと述べている。同書は、リドーが執筆した『政治教育シリーズ』の第一巻である。

26) ザイナル・ムッタキンへのインタビューより。(2008年7月25日実施)

27) 1980年代初頭、政府が集団によるイスラームの活動に圧力を強めていた時代にスタートしたタルビヤは、当初、政府の弾圧が及ばないように、慎重に活動を進めていたようである。純粋にイスラームの基礎を学ぶ内容で政府批判などは公言しない上、それぞれの学習グループは、人目に付くことを避け、個別にリーダーや各メンバーの家を会場にして学習を進めた。ムッタキンは、当時のタルビヤを「組織化されていない運動(gerakan yang tidak dibentuk)」と述べている。

小規模の学習グループはハラコと呼ばれ、そこではイスラーム神学 (akidah) やタウヒード (神の唯一性) が重視された。最初に学ぶのは、イスラームの信仰宣誓の意味、アッラー、聖預言者、イスラーム、人間を知ることである。勉強会にはクルアーンの持参が義務付けられ、学習の際には、直接、原典のテキストを読むということが行われた。ムッタキンによれば、タルビヤではイスラームの基礎の勉強が非常に重視され、ここまでの内容を修得するのに1年以上がかかるが、これらの内容を正しく理解した人は、自分から学び行動し変わっていくことができるという。

ムッタキンらタルビヤの参加者は、あるハラコで一定期間の勉強を終えると、学習をさらに続けながら別のハラコのリーダーとなり、自分が学んだ内容を後輩たちに教える役を任された。このように学びながら教えることの根拠は、次のクルアーンの章句だという。《あなたがたは、啓典を教えることによって、また学ぶことによって、主の忠実なしもべとなりなさい》(イムラーン家章79節)。<sup>28)</sup> ムッタキンは、アッラーの忠実なしもべになるため、クルアーンで命じられたようにクルアーンを学び、同時にこれを後輩たちに教える活動を実践したのである。1983年半ば、インドネシア大学政治社会学部に入學すると、同じ学部の人や後輩を集めて小グループを作り、彼らを指導し始めた。また、高校時代やPIIの友人関係を通じて、ジャカルタ以外の地域の大学でも学習グループを結成し、週末ごとにジョグジャカルタやスラバヤに出向いて指導する日々を過ごした。パンチャシラ「唯一原則」を受諾せず、非合法化される前後のPIIには、政府の圧力が強まり、組織的な活動はできなくなっていた。しかし、ムッタキンの世代のPIIメンバーは、スハルト政権に弾圧されていたが故、逆に結束力が強く、大学生になっても各地のメンバー同士は個々に連絡を取り合う関係だったという。ムッタキンによれば、タルビヤはこうした個人のネットワークを通じて急速に拡大したのであり、何らかの組織が存在し計画的に拡大が図られたわけではない。ムッタキン自身、自らの生活費を節約して週末ごとに各地に赴く旅費を捻出した。誰かに強要されているのだったら、ここまで熱心で献身的な活動はできなかったであろう。“学びながら教える”というコンセプトのもと、タルビヤはそこに関わる学生たち自身の力により、短期間で全国の主要な大学に広まっていったのである。

HMIなど既存のイスラーム学生組織について、ムッタキンは、イスラームをスローガンとして使うだけで、メンバーの行動や理解にイスラーム的なところは感じられないと批判的である。一方タルビヤでは、学び教えることによりイスラームを理解し実践することの大切さを学

28) 原典では、《قُولُوا رَبَّانِيْنَ بِمَا كُنْتُمْ تُعَلِّمُوْنَ الْكِتَابَ وَبِمَا كُنْتُمْ تُتَرَسُّوْنَ》。日本ムスリム協会の訳では、《あなたがたは、主の忠実なしもべとなりなさい。あなたがたは啓典を教えられているのである。それを誠実に学びなさい》とされているが、原典およびインドネシア語訳《Hendaklah kamu menjadi orang-orang rabbani, karena kamu selalu mengajarkan al-Kitab dan karena kamu tetap mempelajarinya》に従い、本文のように筆者が訳した。



び、人間としての中身や言動、他人に対する態度が改善される。それが学生たちに受け入れられたのだと、彼は評価する。

ムッタキン自身は、その後もタルビヤを広める活動を継続すると共に、1980年代後半、後の福祉正義党の幹部になるラフマット・アブドゥッラー<sup>29)</sup>らと、イスラーム雑誌『サビリ』を創刊する。1993年に同雑誌は発禁処分になるが、ムッタキンらは、1998年にスハルトが退陣した後、これを復刊させた。<sup>30)</sup>しかし彼自身は、現実の政治活動の煩わしさを嫌い、1998年の正義党創設にも現在の福祉正義党にも参加しなかった。かつて共に活動した福祉正義党のメンバーたちに一定のシンパシィを感じつつ、現在は彼らから離れ、個人で後輩へのダアワを続けている。

### II-3-3 サルマンとタルビヤ、双方の活動を経験——ディディク・アグス<sup>31)</sup>

ディディク・アグスは、1987年、バンドゥン工科大学の薬学部に入學した。先に述べたとおり、バンドゥン工科大学では、同年、学生たちのダアワ活動に重点を置くガマイスが誕生している。当時は依然として、イスラームに対する体制の警戒が強かったが、サルマン・モスクのトレーニングに全国の高校生や大学生が参加したり、またイスラーム書籍が一般に流通して読まれるようになるなど、青年層のイスラーム学習に対する熱意は高まっていた。大学入學当時、クルアーンを流暢に読誦することすら出来なかったアグスも、宗教を学んでみたいという思いがあり、すでに全国にその名が知られていたサルマン・モスクの活動に参加したという。ラマダン（断食）月の行事を企画する委員会に参加したり、短期トレーニングに参加したりした。しかしその後、ガマイスのメンバーにもなったアグスは、ガマイスの学生の間で徐々に広まっていたタルビヤのハラコで学ぶようになり、次第にサルマンの活動を離れ、ガマイスの活動とタルビヤの学習に専念するようになっていった。

タルビヤに参加するようになったきっかけは、ガマイスが主催したイスラームのトレーニングだった。プサントレン・キラットと呼ばれるこの育成トレーニングでは、大学の長期休暇中の約1カ月、郊外のプサントレン（イスラーム寄宿学校）に泊り込み、イスラーム諸学の講義を受けたり参加者同士で議論をするなど、様々な角度からイスラームを学ぶ。アグスが参加したプサントレン・キラットで、講義の一部を担当したのがタルビヤのウスターズ<sup>32)</sup>だったという。トレーニング終了後、参加した学生たちのうち、タルビヤに惹かれた人たちが自主的に集まり、継続して学習の機会を持つということになり、アグスも友人に誘われて勉強会に参加

29) ムッタキンによれば、アブドゥッラーは彼より10歳ほど年上だが、アブドゥッラーがタルビヤに参加したのはムッタキンとほぼ同時期であり、同じくアミヌディンと共に学習を進めたという。

30) イスラーム雑誌『サビリ』については、Rijal [2005] に詳しい。

31) ディディク・アグスへのインタビュー（2008年11月21日実施）より。

32) ウスターズは、アラビア語で「先生」を指す単語。インドネシア語では、特に、イスラームを教える先生を指す。



するようになった。講師が毎週ジャカルタからバンドゥンに来て、勉強会を指導した。アグスがこの勉強会をタルビヤの学習だと認識したのは、ずいぶん後になってからである。また、大学内に別のタルビヤグループがあったかどうか分からないという。当時、タルビヤの運動は表立って行われていたわけではなく、一学生であるアグスが全体像を把握することは不可能だった。しかし彼は、この勉強会に毎週、意欲的に参加した。タルビヤの学習に惹かれた訳を、サルマンのトレーニングとの比較で彼はこう話している。「サルマンのトレーニングは、一度きりのもの。短期間の集中的なトレーニングでイスラームに目覚めさせられるが、その後のサポートはなく、一人放り出されたように感じた。一方タルビヤは、毎週の集まりを通じてイスラームを思い出し、学ぶ熱意を継続させることができる。定期的に仲間同士で勉強し議論しあうことで、独学で勉強する際に陥り易い誤解や間違いを避けることができ、皆で知識を高め共有することができた。」

アグスは、東部ジャワのトゥバン出身で、クジャウェンと呼ばれるジャワ神秘主義の傾向が強い環境で高校時代までを過ごしている。地域的には、イスラーム伝統派の大衆団体ナフダトゥール・ウラマーの地盤であるが、家族や周囲の人々のイスラームの理解度はとても低かったという。礼拝や断食は行っていたが、イスラームを体系的に学ぶ機会に恵まれなかったアグスに対し、タルビヤはイスラームが様々な問題の解決策になることを教えた。現実のインドネシアの社会を良くしたいと考えていたアグスにとって、武力を伴うジハードや、シャリーアの性急な施行によるイスラーム国家樹立の思想は受け入れがたかった。イスラームの基礎や、聖預言者の時代の社会形成などを継続して学ぶことができるタルビヤは、将来社会を担う自分たちにとって必要なものだと感じたという。

アグスは、ガマイスでコミュニケーション・情報部の部長を務めながら、タルビヤの活動も継続した。タルビヤでは、自分が学んだ内容を他の人に教えるという機会を通じて、自分自身の学習意欲がさらに高まり、イスラームの理解も深まったという。先輩後輩のつながりを通じ、ガマイスでも、タルビヤに参加する人数は次第に増え、アグスが大学を卒業する頃には、ガマイスの多くのメンバーが参加するようになっていた。タルビヤが勢力を伸ばすのと並行して、1990年代初頭にガマイスは大学公認のダアワ・キャンパス組織となり、現在に至るまで、タルビヤを取り入れたメンバー育成が活発に行われている。アグスは卒業後、リーダーとしてバンドゥン工科大学薬学部の後輩たちのハラコを指導した。また1990年代後半になると、自分が学び教えている手法が全国的な運動になっていることを認識し始めた。複数のハラコが合同で勉強会を開く機会が頻繁にあり、こうした勉強会の準備や実施を通じて各地の活動家と知り合い、運動がつながっていると感じるようになったと語る。アグスはその後もタルビヤの活動を続け、現在では、福祉正義党の西バンドゥン支部代表を務めている。

II-3-4 現在のダアワ・カンパス活動家——フィディ<sup>33)</sup>

2005年にバンドゥン工科大学の理学部に入学したフィディは、現在、ガマイスの財務部部長を務めている。西部ジャワのチレボン出身で、高校時代からイスラームの勉強会に参加することが好きだったフィディは、大学に入学してすぐ、宗教の授業の一環で参加が義務付けられていたメントリングに積極的に参加した。メントリングもタルビヤのハラコと同様、小グループでのイスラーム勉強会である。現在では多くの大学で、必修教科である宗教の一部として、ムスリムの学生たちにこのメントリングを義務付けている。また多くの場合、各大学のダアワ・カンパス組織が大学から委託されて、このメントリングを管理し運営している。<sup>34)</sup> ガマイスでも、学生たちのグループ分け、リーダーとなる上級生の選抜、指導、支援、教える内容や評価基準の作成、評価の管理を行っている。フィディは、このメントリングでアッラーや聖預言者、イスラームについてなど、教えの基礎を学んだ。必修の期間は半年あるいは1年間だが、各グループのリーダーは特に優秀な後輩たちに対して、学習継続のためタルビヤのハラコへの参加を勧めることが多い。フィディも、メントリングの期間終了間際になり、リーダーから次のステップへの勧誘を受けて初めて、これがタルビヤに続いているものだとということを知ったという。

フィディによれば、現在、ガマイスの主要メンバーは皆タルビヤで学んでいる。彼女も、ダアワは一人で行うより団結して行う方が効果的だと思い、ハラコでの学習継続を決めた。善行を行おうとする人たちが団結し、イスラームを正しく実践することが出来れば、人々が福祉と公正を享受することが出来るようになると思ったからである。ハラコでの学習が進むにつれて、ダアワの緊急性や、共同体の問題や解決策について学ぶことが多くなり、現在のインドネシアが抱える問題は、民主主義が主張されているにもかかわらず社会の公正が達成されていないことだと理解するようになった。またフィディにとって、大学は社会のミニチュアである。ガマイスで活動しているのは、大学生として大学を拠点にダアワの活動を実践していく義務があるからだ。タルビヤで学び、社会におけるイスラームの発展を目指すと同時に、大学の中でより多くの人がより良くイスラームを実践できるよう貢献したい。クルアーンには、あらゆる

33) フィディへのインタビュー（2008年7月26日実施）より。ガマイスでの役職などは、インタビュー当時のものである。本稿で掲載した女性に対するインタビューはフィディのもののみだが、実際には、女性のハラコも男性のものと同様、多数存在し、また大学のダアワ活動にも多くの女子学生が参加している。タルビヤで学ぶ基本的な内容は男女で違いはないが、筆者の参与観察によれば、女性のハラコでは、結婚し家庭を持つことや、出産し母になることのイスラーム的な理想像など、女性特有のテーマがしばしば議論されている。

34) 筆者の調査によれば、インドネシア大学の各学部、バンドゥン工科大学、アイルランガ大学、スラバヤ工科大学などで、現在、メントリングが宗教の教科の一部として学生に義務付けられており、各ダアワ・カンパス組織が実質的な運営を担っている。（インドネシア大学では、各学部を設置されたダアワ組織がメントリングを運営しており、大学レベルのダアワ・カンパス組織サラム・ウーイーは、学部間の調整や助言などを行うのみである。）

問題を解決できるヒントが含まれている。そのクルアーンの記事を参照し、状況に即したコンセプトや戦略を見つけること、それがガマイスの幹部であり、タルビヤで学ぶ自分に課された責任だと思っている。

### III タルビヤの手法——学習の場としてのハラコ

本章では、前述の4人の活動家の話をもとに、タルビヤの学習単位であるハラコの特徴を明らかにしたい。タルビヤではハラコ以外にも、宿泊学習会やスポーツなど様々な側面から一個人を育成するプログラムが設定されているが、こうした活動も通常ハラコ単位で行われる。<sup>35)</sup>ハラコはタルビヤの活動の中心と言える。

ハラコ (halaqo, halaqa) は、アラビア語起源で「サークル」を意味する単語である。一人のリーダーと、10人前後の学習者から成るグループで、毎週1回2時間程度の勉強会が開催される。場所や日程は、リーダーや参加者の都合に合わせてフレキシブルに変化する。一つのハラコは、通常、同年代で同レベルのイスラームの知識を持つ学習者で構成される。

ハラコを通じた学習の特徴として、その継続性や双方向性、グループ内の結束が挙げられる。インドネシアでイスラームを学ぶ場として一般的なブンガジアン（宗教講話会）は、通常、ウラマーやキアイと呼ばれる宗教家が素人の民衆に対して一方的に話をするものである。現在では、様々な形態のブンガジアンが行われているが、純粋にイスラームを学ぶよりは、特定の集団や地域社会の交流の場としての機能を担うことも多く、必ずしも意欲を持った学習者が継続的に勉強できる場とは言えない。これに対しハラコでは、イスラームを学ぶ意欲を持続させ、自由な発言や議論を通じて、学生たちの好奇心や知的探究心を満たすことが可能だった。また、様々なイスラーム組織で実施される育成トレーニングでも、一定の期間内で、講義形式の知識伝達が行われることがほとんどである。バンドゥン工科大学のサルマン・モスクでは、先述のとおり、1970年代、LMDと呼ばれる先駆的なダアワのトレーニングが開発され、全国の多くの学生たちを惹きつけたが、その後は、アグスのインタビューで明らかな通り、タルビヤのハラコの方が、学生たちに広く受け入れられるようになっていった。学習者に対する継続的な支援という点で、タルビヤの手法はサルマンのトレーニングに勝っていた。各ハラコでは、リーダーや同じ年代の仲間たちと毎週顔を合わせ、車座になって学ぶことで、家庭的な雰囲気を作られ、仲間同士の結束が強められる。教材を学ぶと同時に近況を報告し、悩みを打ち明けたり、

35) アグスによれば、タルビヤには、肉体的 (jasadiyah), 思想的 (fikriyah), 霊魂的 (ruhiyah) な各側面から人間を成長させる内容が含まれている。肉体はメンバー同士で行うサッカーや水泳で、思考はハラコで、霊魂は毎月実施される宿泊学習会で鍛えられ、清められるという。(2008年11月21日実施のインタビューより)

お互いに助言しあったりすることに時間が割かれ、欠席したメンバーに対しても、リーダーや他のメンバーが個別に連絡を取るなどの配慮が払われている。

また、ハラコで教えられる内容も、学生たちにとっては魅力的なものであった。<sup>36)</sup> 複数のインタビューで明らかな通り、最初に学ばれるのはイスラーム神学でありタウヒードであり、イスラームの教えの基礎である。その中身は、イスラームやアッラーや聖預言者を知りこれらを愛すること、それにより他の者に隷属しない独立した人間になれる、ということであった。タルビヤは、アグスのように、イスラーム教徒でありながら礼拝や断食の実践だけで過ごしてきた多くの学生たちに、イスラームや神について触れる機会を提供した。<sup>37)</sup> こうしてイスラーム教徒としての信仰心を強めると、フィディがハラコで実践しているように、次の段階で、共同体の問題やダアワの重要性について議論するようになる。ここで常に参照されるのは、ムッタキンの時代からクルアーンの章句であり、またイスラーム共同体の理想としての聖預言者の時代の社会形成のあり方であった。タルビヤは、学生たちにイスラーム教徒としての覚醒を促し、イスラームの学習と実践を通じて、現実の社会を漸進的に改良していけることを意識付けるものである。ムッタキンは、タルビヤにおけるイスラームと政治や社会との関係について、こう答えている。「タルビヤでは、イスラームを完全に正しく理解し実践しようと努める。そうすればおのずと社会問題や政治について考えざるを得なくなる。なぜならイスラームでは、周りの人が空腹に苦しんでいるのに、自分が満腹になってはいけなと教えられているから」。タルビヤでは、シャリーアの施行や武力を伴うジハードが声高に叫ばれるわけではないが、社会状況に配慮し、政治に参入して社会変革を目指すことは必然だと考えられているのである。

さらに、ハラコで学ぶ学生たちを増やし、彼らの学習意欲を維持させた構造的特徴としては、「学びながら教える」という形態、近年の大学でのメンタリング義務化やレベル設定が挙げられ

36) タルビヤの教材は、現在、一般向けに出版され販売されており、その学習内容を知ることができる。筆者の調査によれば、全国各地の学生たちが参照する教材として主要なもの一つに、『タルビヤの教材——ダアイとムラッビのためのカリキュラムガイド』(*Materi Tarbiyah: Panduan Kurikulum bagi Da'i & Murabbi*)がある。この中で学習テーマとして、① 信仰宣誓の意味、② アッラーを知ること、③ 聖預言者を知ること、④ イスラームを知ること、⑤ 人間を知ること、⑥ クルアーンを知ること、⑦ 思想的侵略、⑧ 悪魔の種類、⑨ ダアワの問題、⑩ 真理と虚偽、⑪ 共同体の構築、⑫ イスラームのタルビヤ、⑬ ダアワのフィクフ、の13の項目が挙げられている。①～⑥ではイスラーム的な個人を育てるためのイスラームの基礎、⑦～⑬では共同体や社会形成のために必要な内容が学ばれる。

37) ハラコでの学習は、アラビア語を修得し、キアイと呼ばれる指導者からイスラーム諸学を学ぶプサントレン(イスラーム寄宿学校)のものとは、内容も手法も大きく異なっている。ただし、サルマン運動など既存の大学イスラーム運動とも異なる点は、リドーやアミヌディンなど、中東留学を経験しアラビア語に長けたリーダー達がいたことである(上述のリドーへのインタビューより)。イスラームにおけるアラビア語や、クルアーンを理解することの重要性を認識していた彼らにより、日々の学習時のクルアーンの携帯や、イスラーム関連語のアラビア語表記が定着していった。



る。ムッタキンが話した通り、タルビヤの開始当初から、ハラコで一定の勉強を終えた学習者は、別のハラコのリーダー役になり、それまでに学んだ内容を教えることが期待されていた。ムッタキンは自らのネットワークを通じて、インドネシア大学や各地方の大学でハラコを指導し、参加者を増やしていった。ハラコは、当初から当事者の友人関係や先輩後輩のつながりを通じて、ねずみ算式に拡大しうる構造を有していた。また現在では、必修教科の宗教の一部として、ムスリムの学生たちに小グループでの学習、メンタリングを義務付ける大学が増えている。大学入学後の一定期間、このメンタリングで学んだ学生の中には、その後フィディのようにタルビヤのハラコへ移行し、学習を継続する者も多い。大学側に認知され、全てのムスリム学生の育成を一定期間担えるようになったことは、タルビヤの裾野を広げ、学習者のさらなる増加に寄与することにつながっている。さらにタルビヤでは、学習内容が体系化されていくのに応じ、個人の理解度や修得度に応じたレベル分けがなされるようになっていった。現在では、初級レベルから順に、プムラ (Pemula)、ムダ (Muda)、マディヤ (Madya)、デワサ (Dewasa)、アフリ (Ahli)、プルナ (Purna) という段階が設定されている。あるレベルのメンバーで構成されるハラコを指導するのは、より上級レベルのリーダーである。プムラやムダといった初級レベルでは、前述のようなイスラームの基礎の学習が教材に沿って進められるが、マディヤ、デワサ、アフリとレベルが上がっていくにつれ教材を使った学習は少なくなり、社会生活に密着した問題を議論し、その解決策を探る学習が多くなる。フィディは、大学1年の時に参加したメンタリングでプムラやムダのレベルの内容を学び、2年生になるとマディヤレベルのハラコに参加して、様々な社会問題をも議論するようになった。各レベルには達成すべき基準が設けられており、修了の基準に達したことをリーダーが評価すると、その学習者は次のレベルに進むことになる。現在のタルビヤは、レベル分けと評価基準の提示によって、学習者が意欲を持って段階的に学習できるよう構成されているのである。<sup>38)</sup>

ハラコを用いたタルビヤの学習形態は、ムスリム同胞団の団員養成の手法を採用したものであると、複数の先行研究で言及されている。確かに、ムスリム同胞団の創設者ハサン・アル＝バンナは、リドーがインドネシア語に訳した著作『マジュム－ア・ラサーイル』(インドネシア語では *Risalah Pergerakan Ikhwanul Muslimin* (ムスリム同胞団運動論)) の中で、メンバー

38) タルビヤのレベルは、現在、福祉正義党の党員を分けるレベルと同じものである。初級レベル(プムラやムダ)では、同党の党員ではない学習者もかなりの数にのぼるが、上級レベルでは、政党活動への参加や貢献も評価の対象になるため、党員でない学習者は非常に少ない(福祉正義党西ジャワ支部の幹部育成部部長ムハンマディへのインタビュー(2008年11月20日実施)より)。ムハンマディによれば、西ジャワ支部で、タルビヤのハラコに参加している学習者(kaderと呼ばれる)の数は、現在126,000人余り。政党を作る前の1998年の統計では、この数は約17,000人であり、約10年で7倍以上に増加した。ちなみに、福祉正義党中央執行委員会が把握している全国の中核党員(Anggota Inti: マディヤ以上のレベル)の数は約80万人である。(2008年11月28日実施、同委員会幹部ソヒブル・イマンへのインタビューより)



を育成しメンバー間の絆を強めるために、ウスラ (usrah)<sup>39)</sup> の立ち上げを呼びかけている [Banna 1997: 195-190]。また、実際にエジプトのイスラム同胞団では、バンナの提唱によって 1934 年から、「家族組織 (nizam al-usar)」<sup>40)</sup> によるメンバーの教育、訓練が行われていた [小杉 1989: 59]。さらに、リドーらタルビヤの初期からの指導者たちが、中東留学中に同胞団の思想や手法を知り、これに感銘を受けていたことは、インタビューから明らかになった。しかし、リドー自身の言葉に従えば、ハラコやウスラのような小グループの学習は、聖預言者が教友たちにイスラームを伝える際に用いたものであり、イスラームの宣教においては普遍的な手法である。ハラコは“同胞団独自の手法”ではなく、“イスラム独自の手法”というのが正しいのである。<sup>41)</sup> またインドネシアでは、イスラームの学習に同様の手法を用いたのはタルビヤのグループだけではない。同胞団やバンナの思想がインドネシア語に翻訳され、人々に読まれるようになった 1980 年代以降、前述のサルマンを始め複数のイスラーム組織でこの手法が採用された。どの組織でも、一人のリーダーと複数のメンバーで小グループが構成され、学習が進められている。しかし、タルビヤのハラコのように、長期に渡る豊富な学習内容を持ち、学びながら教えるという形式を体系的に推奨しているものは他に例がない。以上のように手法の側面から検証する限り、タルビヤが「インドネシアのイスラム同胞団」だと言う見方は必ずしも適切ではない。むしろタルビヤのハラコは、同胞団での導入を通じて現代的な有用性が確認された聖預言者の時代からのイスラムたちの学習形態であり、このことを中東留学中に知ったりリドーらタルビヤの指導者たちによってインドネシアでハラコとして紹介され、学生たちの実践を通じて次第に体系化されていった手法だと言えるのである。

#### IV 今後の展望

本稿では、当事者へのインタビューを通じて、タルビヤの導入や拡大の経緯、また、学生たちがイスラームを学ぶ手法としての特徴を検証した。タルビヤは、サウジアラビアの留学から戻った人物を指導者として、ジャカルタの一部の高校生に受け入れられ、その後は、大学生になった彼らによって各地の大学に広まっていった。先行研究では、中東帰りの留学生たちの役割や、世俗大学のダアワの活動家たちがその受け皿になったことが断片的に指摘される程度であったが、インタビューを通じて、中東留学帰りの人物らと最初にタルビヤに参加した高校生

39) アラビア語で“家族”を意味する単語。インドネシア語では、一般に“ウスロ (usroh)”と発音されることが多い。

40) 小杉 [1989] では「細胞組織」と訳されているが、アラビア語の usar は家族 (usrah) の複数型であることから、本文では「家族組織」と訳した。

41) 2008 年 11 月 27 日実施のインタビューより。

の間には PII など既存のイスラーム組織の先輩後輩というつながりがあったこと、その後、ダアワ評議会（DDII）やサルマン運動で築かれたネットワークなどを活かしながら、学習に参加した高校生や大学生自身の努力と自発的な活動を通じて拡大がもたらされたことが明らかになった。タルビヤの学習内容は、特に初期の段階においては、純粋にイスラームの教えの基礎を学ぶものである。ムスリムとして生まれながら、高校生や大学生になるまで、こうした基本的な学習の機会に恵まれなかった学生たちに対して、自らのアイデンティティを確認し信仰心を強める機会を提供した。その上で次の段階では、イスラームの教えに立脚した個人変革や社会改革の道筋を学ぶ。イスラームを学び理解するだけでなく、日々の生活で社会と関わる中で実践していくことが求められている。規模の拡大と同時に、内容や手法の体系化が進められ、各地の大学に誕生したダアワ・キャンパス組織の学生たちに受け入れられた。各大学におけるダアワ・キャンパス組織の発展や、全国的な影響力の拡大にも、タルビヤによるメンバー育成が寄与している。さらに現在では、タルビヤは、先行研究が指摘するように政党として帰結しただけではなく、社会の様々な側面のイスラーム化を後押しする役割を担っている。大学卒業後もタルビヤの学習を続けながら、教育、文化、出版などの分野でイスラームを広める活動を展開し、それを職業としている人々が少なからず存在する。

最後に、近年のタルビヤの変容と、今後の展望に触れておきたい。タルビヤは、スハルトの長期政権が崩壊した 1998 年を境に、組織化された活動へと変化を遂げている。1998 年 3 月、全国の大学のダアワ・キャンパス組織を束ねるダアワ・キャンパス組織友好フォーラム（FSLDK）の第 10 回全国大会にて、インドネシア社会の改革のため行動していく学生組織、インドネシアムスリム学生行動連盟（KAMMI）の設立が宣言された。さらにその数カ月後には、タルビヤで学び活動する人々が結集して福祉正義党の前身である正義党が創設された。それ以前、学習内容や手法は体系化されてはおらず、日々の活動やその拡大は、参加する学生たちによって自発的に個人的に進められていた。しかし政党となって以降は、学習内容や手法が整備され、政党としての目標も掲げられて、社会変革が公に目指されるようになった。一方で、かつては純粋にイスラームを学ぶために学生たちに取り入れられてきたタルビヤが、現在では、政党の育成プログラムとして認識されている。一般的に、タルビヤに参加することは、福祉正義党の黨員になることの第一歩だと考えられるようになった。福祉正義党の幹部になったリドー自身から、政党と学生たちの乖離についての危機感を聞くことができた。「私は今でも、タルビヤやハラコが学生たちの育成にとって有効だと思っている。しかしながら問題は、以前には後輩の指導に専心していた人たちの多くが政治家になり、学生たちのことを気遣う時間と余裕がなくなってしまったことだ。学生は、常に正しいイスラームを探し求め、それを吸収する。我々が彼らの期待に応えられなければ、彼らは我々から離れていってしまうだろう。福祉正義党は、“ダアワ政党”をコンセプトに掲げたが、現実の政治の場において、このコンセプトを守り実践

することはとても難しい。私自身にとって、政治よりもダアワが重要。精神的なことを考え、実践する時間をもっとあればいいのだが……。実際に、政党が誕生して10年以上が経過し、タルビヤに参加する学生たちからは、福祉正義党の現実主義や妥協の姿勢に不満の声が聞かれるようになった。特に、総選挙で躍進した2004年以降、福祉正義党は、各地の地方首長選挙での勝利を目的に、非イスラーム政党も含めた様々な政党と連携しており、こうした政治工作を無節操な行為だと見る学生も少なくない。各大学では、解放党などタルビヤ以外の勢力も活動を活発化させている。タルビヤからこれらのグループに移っていく学生たちも多いし、今後この傾向が益々加速する可能性もある。学生たちの間でタルビヤがいかに展開していくのか、また学生たちが、イスラームの学習やダアワの活動として何を選択していくのか、今後注視していきたい。

(本稿は、平成19・20年度日本学術振興会科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。)

#### 参 考 文 献

- 小杉 泰(編). 1989.『ムスリム同胞団——研究の課題と展望』国際大学国際関係学研究科.  
見市 建. 2004.『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』東京:平凡社.  
中田 考. 1994.「宣教国家サウジアラビアのイスラーム対外支援」『中東研究』1994年10月号No. 395: 10-27.  
日本ムスリム協会(編). 1982.『日亜対訳・注解 聖クルアーン』東京:日本ムスリム協会.  
野中 葉. 2005.「インドネシアにおけるジルバップの現代的展開に関する研究——イスラームと向き合う世俗高学歴の女性たち」慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士論文.  
———. 2009.「インドネシアの学生ダアワ運動の原点——サルマン・モスクにおけるイスラーム運動の展開」*Keio SFC Journal* 8(2): 147-160.  
大塚和夫他(編). 2002.『岩波イスラーム辞典』東京:岩波書店.  
高橋宗生. 1995.「国民統合とパンチャシラ」『現代インドネシアの政治と経済——スハルト政権の30年』安中章夫; 三平則夫(編), 53-94 ページ所収. 東京:アジア経済研究所.  
al-Banna, Hasan. 1997. *Risalah Pergerakan Ikhwanul Muslimin 2*. Translated by Lc. Anis Matta, Lc. Rofi' Munawar and Wahid Ahmadi. Surakarta: Era Intermedia. (原著 al-Banna, Hasan. *Majmu'ah Rasail Al-Imam Asy-Syahid Hasan Al-Banna*. Iskandaria: Daarud-Dakwah.)  
Bruinessen, Martin Van. 2003. Post-Suharto Muslim Engagements with Civil Society and Democratisation, paper presented at the Third International Conference and Workshop "Indonesia in Transition," organised by the KNAW and Labsosio, Universitas Indonesia, August 24-28, 2003.  
Culla, Adi Suryadi. 1999. *Patah Tumbuh Hilang Berganti: Sketsa Pergolakan Mahasiswa dalam Politik dan Sejarah Indonesia (1908-1998)*. PT Raja Grafindo Persada.  
Damanik, Ali Said. 2002. *Fenomena Partai Keadilan: Transformasi 20 Tahun Gerakan Tarbiyah di Indonesia*. Jakarta: Teraju.  
Departmen Agama RI. 2004. *Al-Qur'an dan Terjemahnya*. Bandung: CV Penerbit J-Art.  
Furkon, Aay Muhammad. 2004. *Partai Keadilan Sejahtera: Ideologi dan Praksis Politik Kaum Muda Muslim Indonesia Kontemporer*. Jakarta: Teraju.  
Imdadun, Muhammad. 2003. Transmisi Gerakan Revivalisme Islam Timur Tengah ke Indonesia 1980-2002 (Studi atas Gerakan Tarbiyah dan Hizbut Tahrir Indonesia). Master Tesis, Universitas Indonesia.  
Karim, M. Rusli. 1997. *HMI MPO dalam Kemelut Modernisasi Politik di Indonesia*. Bandung: Mizan.

- Machmudi, Yon. 2006. Islamising Indonesia: The Rise of Jemaah Tarbiyah and The Prosperous Justice Party (PKS). Doctoral Thesis, The Australian National University.
- Majelis Pertimbangan Pusat Partai Keadilan Sejahtera (MPP PKS). 2008. *Memperjuangkan Masyarakat Madani: Falsafah Dasar Perjuangan dan Platform Kebijakan Pembangunan PK Sejahtera*.
- Ridha, Abu. 2002. *Pengantar Pendidikan Politik dalam Islam*. Bandung: Asy-Syaamil.
- Rijal, Syamsul. 2005. Media and Islamism in Post-New Order Indonesia: The Case of Sabili. *Studia Islamika* 12(3): 421-474.
- Salman. 2006. The Tarbiyah Movement: Why People Join This Indonesian Contemporary Islamic Movement. *Studia Islamika* 13(2): 171-240.
- Suryadi, Dede. 1999. *Proses Lahir dan Kontroversi NKK/BKK*. Skripsi Sarjana, Fakultas Sastra Universitas Indonesia.
- Yasmin, Ummu. 2002. *Materi Tarbiyah: Panduan Kurikulum bagi Da'i dan Murabbi*. Solo: Media Insani Press.